

ノートテイカー学生の活動継続要因の検討：教員養成系以外の大学の学生に着目して

下中村，武
九州大学基幹教育院

岸川，加奈子
九州大学基幹教育院

横田，晋務
九州大学基幹教育院

田中，真理
九州大学基幹教育院

<https://doi.org/10.15017/6769089>

出版情報：基幹教育紀要. 9, pp.99-114, 2023-02-24. 九州大学基幹教育院

バージョン：

権利関係：© 2022 Faculty of Arts and Science, Kyushu University. All rights reserved. The publisher holds the copyright on all materials published in its journals except special issues, whether in print or electronic form, both as a compilation and as individual articles. All journal content is subject to "fair use" provisions of Japanese or applicable international copyright laws.



ノートテイク学生の活動継続要因の検討ー教員養成系以外の大学の学生に着目してー

下中村 武^{1,2*}, 岸川 加奈子^{1,2}, 横田 晋務^{1,2,3}, 田中 真理^{1,2,3}

¹九州大学基幹教育院, 〒819-0395 福岡市西区元岡 744

²九州大学キャンパスライフ・健康支援センター インクルージョン支援推進室, 〒819-0395 福岡市西区元岡 744

³九州大学大学院人間環境学府, 〒819-0395 福岡市西区元岡 744

Factors contributing to the continuation of students' activities on support for students with difficulties in obtaining audio information: Focusing on support for students enrolled in other than universities of teacher education

Takeshi SHIMONAKAMURA^{1,2*}, Kanako KISHIKAWA^{1,2}, Susumu YOKOTA^{1,2,3},
Mari TANAKA^{1,2,3}

¹Faculty of Arts and Science, Kyushu University, 744, Motooka, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan

²Support section for inclusion, Center for Health Sciences and Counseling, Kyushu University, 744, Motooka, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan

³Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University, 744, Motooka, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan

*E-mail: tshimonakamura@artsci.kyushu-u.ac.jp

Received Oct. 31, 2022; Revised Nov. 21, 2022; Accepted Nov. 21, 2022

This study clarifies the factors contributing to the continuation for peer supporter students in charge of support at universities other than teacher training universities, who provide support to students with difficulties in acquiring audio information. The statistical analysis of the results of the responses of students in charge of support in teacher training university identified in the other previous research, and the results of the questionnaire responses from the 11 students in charge of support obtained in this study revealed significant differences in 4 of the 14 persistence factors, namely, development of new values, sense of self-satisfaction, expectations through support activities, and mental fulfillment. Further examination of the factors that contribute to the continuation of support activities and the content of instructions based on the factors that contribute to the continuation of involvement in support activities will be required in the future.

1. 問題と目的

聴覚障害のある学生や発達障害のある学生（以下、聴覚障害学生等）は、音声情報の取得に困難があり、音声を中心に進行される授業では支援が必要となる。その支援方法としては、音声情報を文字情報に変換し、聴覚障害学生等に伝える「ノートテイク」が特に有効であり、聴覚障害学生等が在籍する大学のノートテイク学生（以下、NT 学生）が担うことが一般的である。しかし、全

国的に NT 学生は不足しており（池谷ら，2021）、NT 学生を養成・確保することは喫緊の課題となっている。

NT 学生を確保するためには、参加動機と継続動機が重要になると考えられるが、以下の先行研究においては、教員養成系大学の NT 学生を対象としたものがほとんどである（小林，2017；新海ら，2017；松下ら，2017；増田，2018；松下ら，2019）。松下ら（2017）、松下ら（2019）では、参加動機として、活動への共感・興味や自己研鑽につながることで、活動に関する経験・周囲からの勧誘、報酬が得られることなどが示されており、継続動機として、自身の人間的成長や他者からの高い評価、交友関係の拡大、人間関係の不和がないこと、活動内容に満足していること、自身の能力が活動に生かせること、時間的な余裕があることなどが示されている。これは、他の先行研究においても同様の結果が示されているが（小林，2017；新海ら，2017；増田，2018）、教員養成系以外の大学ではその活動継続要因については十分に検討されていない。また、教員養成系以外の大学の学生に比較して、教員養成系大学の学生は、将来教員や対人援助に携わるような職を目指している者が比較的多く、障害児・障害者と関わる機会が豊富で、これから先に関わる可能性が大きいなど、障害について考える機会が多く、障害への意識が高いことが示唆されている（高橋ら，2020）。特に、特別支援教育を専攻している学生ほど、この傾向は顕著だと考えられる。加えて、教員養成系大学では、学生が教職という共通の目的意識を持って学べることで、教員養成系以外の大学では、多様な学部の学生と一緒に学ぶことや、交流を持つことを通じて、より幅広いものの見方・考え方に触れることができる（文部科学省，2001）。このような背景の違いがあるため、教員養成系以外の大学の学生では、参加動機や継続動機の内容が異なる可能性がある。

さらに、参加動機や継続動機には、NT 学生への養成内容が影響していると考えられる。NT 学生の養成については、聴覚障害やノートテイクに関する基礎的知識から練習方法、授業に応じた具体的なノートテイク方法等の技術的内容や、利用者の体験談など多岐にわたり、ノートテイクを行うための高度な技術と専門知識が要求される（吉川ら，2001；白澤ら，2002；PEPNet-Japan，2006；PEPNet-Japan，2007；白澤，2017）。これらの内容を学習する機会として、ノートテイクを実施している大学の約半数で、学生や学内障害学生支援担当者、外部専門家等による NT 学生養成講座が開講されている（白澤，2004）。参加動機については、活動への共感・興味や自己研鑽が示されており（松下ら，2019）、これらは NT 学生養成講座で取り上げられる内容であるため、初学者の NT 学生に対する参加動機は一定程度満たされていると考えられる。一方、継続動機については、活動を通しての期待として、新しい知識・技能を得ることや将来の役に立つことなどが示されているものの、NT 養成講座では十分に取り上げられることが少ない内容であり、授業等で支援活動を行っている NT 学生向けのスキルアップや、NT 学生のキャリアパスを知る機会が限られているため（下中村ら，2021；下中村ら，2022a；下中村ら，2022b など）、NT 学生の継続動機は十分に満たされていないと考えられる。そのため、NT 学生の継続動機に着目することが重要であると考えられる。加えて、NT 学生向けのスキルアップ講座や、NT 学生の卒業後のキャリアパスを提示する機会は限られる状況で、NT 学生が活動を継続している要因についても、検討が必要だと考えられる。活動継続年数が異なることによって継続動機が異なる可能性や、教員養成系以外の大学で卒業後もノートテイク活動への関与希望がある場合には特段の要因が生じている可能性がある。そのため、NT 学生

のノートテイク活動の経験年数や、卒業後のノートテイク活動への関与の意識の違いが継続要因になる可能性について検討が必要である。なお、本研究では、ノートテイク活動に3か月以上関わっている場合を「継続」と定義する。

以上のような問題意識から、本研究は、教員養成系以外の大学のNT学生特有のノートテイク活動の継続要因を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2.1. 調査対象・手続き

2022年7月下旬から8月上旬に、教員養成系ではないX大学のNT学生15名を対象として、Microsoft Formsによるアンケート調査を実施し、11名から回答を得た。ノートテイク活動経験年数は、「1-2年目」7名、「3-4年目」4名であった。また、卒業後のノートテイク活動への関与希望は「あり」4名、「なし」7名であった。

2.2. 調査項目

調査項目は、松下ら(2017)、松下ら(2019)を参考に、①卒業後のノートテイク活動への関与希望2項目、②ノートテイク活動の継続に関する肯定的要因10因子(下位尺度41項目)、③ノートテイク活動の継続に関する否定的要因4因子(下位尺度18項目)であった。いずれも選択式と自由記述式とした。なお、①は5件法で、②と③は5件法で回答を求めた後、各因子について具体的なエピソードを記述するように求めた。調査項目の詳細を表1～表3に示す。

表1 ①卒業後のノートテイク活動への関与希望項目

1. 卒業後の職業選択の1つとして、ノートテイク活動に関わりたいと思いますか(大学内での活動に限らず、地域や他大学も含む)。
【そう思う・少しそう思う・どちらとも言えない・あまりそう思わない・そう思わない】
2. 上記のように思う理由を具体的に記述してください。

表 2 ②ノートテイク活動の継続に関する肯定的要因 10 因子（下位尺度 41 項目）

1. 新たな価値観の芽生え
(1)さまざまな人の立場から物事が考えられるようになった
(2)情報保障に対する意識がたかまった
(3)日常生活での他者との接し方が変わった
(4)他者からの感謝や好評価が得られた
(5)少しでも人の役に立っていると実感できた
(6)将来の役に立つ経験ができた
2. 自己成長
(1)障害について自ら知りたいと思うようになった
(2)大学以外でも障害児・者のために貢献しようという気持ちが高まった
(3)障害学生とのコミュニケーション手段が多様化した
(4)自分の持つ技能を高めたいと思うようになった
(5)新しい知識・技能を得られた
3. 人間関係の拡充
(1)障害学生と関わる機会ができた
(2)意識の高い学生と知り合うことができた
(3)友人の輪が広がった
(4)障害学生の想いや抱える課題を知ることができた
(5)支援学生同士でより親密になれた
4. 活動への充実感
(1)空きコマ（時間）を有効活用できた
(2)テイクに入ることが楽しいと思えた
5. 自己満足感
(1)金銭が得られた
(2)気分転換することができた
6. 活動を通しての期待
(1)自分の持つ技能をもっと高めたい
(2)新しい知識・技能を得たい
(3)友人を得ることができる
(4)将来役に立つと思う
(5)支援組織のメンバーともっと関わっていききたい
(6)金銭が得られる
(7)専攻・コース・学年を超えてさまざまな人と出会える
(8)自分の専攻・コース・学年以外の授業を聴講したい

表2 ②ノートテイク活動の継続に関する肯定的要因 10 因子（下位尺度 41 項目）（続き）

7. 自己有能感
(1)自分が役に立っているという実感がある
(2)障害学生支援をすることは自分の使命だと感じている
(3)ずっと続けてこられたことが自信につながっている
(4)障害学生支援の発展に貢献したい
(5)障害学生支援は意義のある大切な活動だと思う
8. 精神的充足
(1)社会的に評価されたい
(2)就職などで有利になるようにしたい
(3)気分転換する時間を確保したい
9. 学業との両立
(1)無理のない範囲で活動できる
(2)他のこととも両立できる
(3)空きコマ（時間）を有効活用できる
10. 活動への適応
(1)活動そのものが楽しく充実している
(2)大した不満がない

表3 ③ノートテイク活動の継続に関する否定的要因 4 因子（下位尺度 18 項目）

1. 人間関係の不和
(1)支援組織内での人間関係にストレスを感じる
(2)障害学生とのコミュニケーションがうまくいかない
(3)普段つながりのない人とのコミュニケーションが取りにくい
(4)自分が役に立っている実感が無い
(5)精神的に追い詰められている
2. 活動内容への不満
(1)支援学生 1 人あたりの負担が大きい
(2)謝礼金がない、または額が少ない
(3)障害のない学生に対しては何とも思わないこと（例：授業中の居眠り）でも、障害学生がすると憤りを感じる
(4)障害学生の持つ権利（例：データを持ち帰ることができる）に不公平を感じる
(5)テイクのためだけに大学へ来るのは億劫だ

表3 ③ノートテイク活動の継続に関する否定的要因4因子（下位尺度18項目）（続き）

3. 能力不足
(1)十分な支援が提供できない
(2)支援機器（PC、iPad など）の仕組みが複雑で十分に操作ができない
(3)専門的な知識が不足している
(4)意見を交換できる機会が少ない
4. 時間的制約
(1)テイクに入ることによって時間が拘束される
(2)忙しくてテイクに入る時間がない
(3)自分のこと（授業、バイトなど）との両立ができない
(4)テイク以外の仕事で拘束される時間が多い

2.3. 分析方法

継続要因の下位尺度について、「5点（当てはまる）」から「1点（当てはまらない）」とし、因子ごとに平均値を算出した。なお、結果の解釈に当たっては、4点以上を「比較的高い」、2点以下を「比較的低い」とみなした。

教員養成系大学と教員養成系以外の大学によって継続要因に違いがあるかを明らかにするため、教員養成系大学のうち特別支援教育を専攻する学生が多数を占める大学を比較対象として選定し、因子ごとに回答者全体の平均値と先行研究（松下ら，2017；松下ら，2019）の平均値の差について対応のないt検定を行った。また、各因子や卒業後のノートテイク活動の関与希望について予備的に検討するため、自由記述については、第1著者が、「特になし」や当該因子に関係しない記述を除外した上で、文意を損ねない範囲で類似した内容に分類した。

2.4. 倫理的配慮

調査協力の依頼にあたり、プライバシー保護や守秘義務、自由意思での参加について説明し、結果を公表することについて同意を得た。

3. 結果

3.1. 教員養成系大学と教員養成系以外の大学による継続要因の違い

肯定的要因については、「新たな価値観の芽生え」、「自己成長」、「人間関係の拡充」、「活動への充実感」、「活動を通しての期待」、「学業との両立」、「活動への適応」が比較的高く、否定的要因については、比較的低い項目は見られなかった。

次に、t検定を行ったところ、肯定的要因については、「新たな価値観の芽生え」($t(47)=2.39, p<0.05$)、「自己満足感」($t(47)=3.10, p<0.05$)、「活動を通しての期待」($t(47)=3.74, p<0.05$)、「精神的充足」($t(47)=3.93, p<0.05$)の項目で、教員養成系以外の大学のほうが、5%水準で平均値が有意に高いこ

とが明らかになった（表 4、表 5、図 1、図 2）。その他の項目において有意差は認められなかった。否定的要因については、教員養成系大学との違いは見られなかった。

自由記述の分類の結果（表 6～表 9）、「新たな価値観の芽生え」は言及数 14、項目数 5、「自己満足感」は言及数 10、項目数 4、「活動を通しての期待」は言及数 11、項目数 7、「精神的充足」は言及数 6、項目数 3 となった。

「新たな価値観の芽生え」では、ノートテイクの方法や他者からの評価、多くの関係者の支えがあること、人の役に立っている意識、アクセシビリティの意識に関する記述が見られた。「自己満足感」では、リフレッシュできることやスキルアップやモチベーションにつながることで、満足感が得られること、責任を果たすことに関する記述が見られた。「活動を通しての期待」では、専門的知識・技術の習得や交流のきっかけになること、波及的効果があること、貴重な経験であること、過去の経験を生かせること、支援担当授業への関心があること、就職活動に生かせることに関する記述が見られた。「精神的充足」では、他のティーカーから感謝されることや知人からの評価が得られたこと、将来の役に立つことに関する記述が見られた。

表 4 肯定的要因における平均値の比較

項目	本研究の結果		松下ら (2019)		t 値
	(N=11)		(N=38)		
	平均値	SD	平均値	SD	
新たな価値観の芽生え	4.33	0.91	3.82	0.52	2.39 *
自己成長	4.45	0.63	4.14	0.63	1.44
人間関係の拡充	4.11	0.85	3.78	0.77	1.22
活動への充実感	4.18	0.83	4.30	0.64	0.51
自己満足感	3.55	1.16	2.49	0.95	3.10 *
活動を通しての期待	4.26	0.82	3.27	0.76	3.74 *
自己有能感	3.93	1.13	3.76	0.76	0.58
精神的充足	3.61	0.92	2.36	0.93	3.93 *
学業との両立	4.09	1.00	4.20	0.55	0.48
活動への適応	4.14	0.76	4.08	0.83	0.21

*: $p < 0.05$

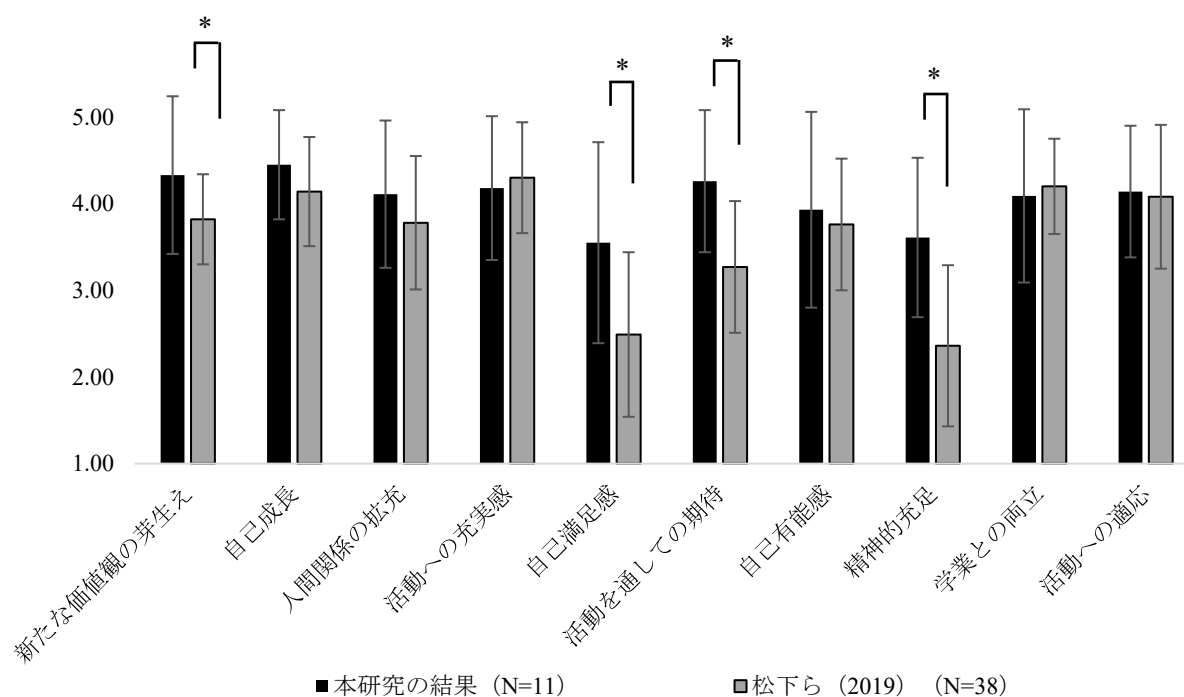


図 1 肯定的要因における平均値の比較

表 5 否定的要因における平均値の比較

項目	本研究の結果 (N=11)		松下ら (2017) (N=38)		t 値
	平均値	SD	平均値	SD	
人間関係の不和	2.16	1.14	2.06	0.90	0.31
活動内容への不満	2.29	1.33	2.02	0.64	0.94
能力不足	3.05	1.19	2.67	0.84	1.20
時間的制約	3.18	1.07	2.91	0.97	0.79

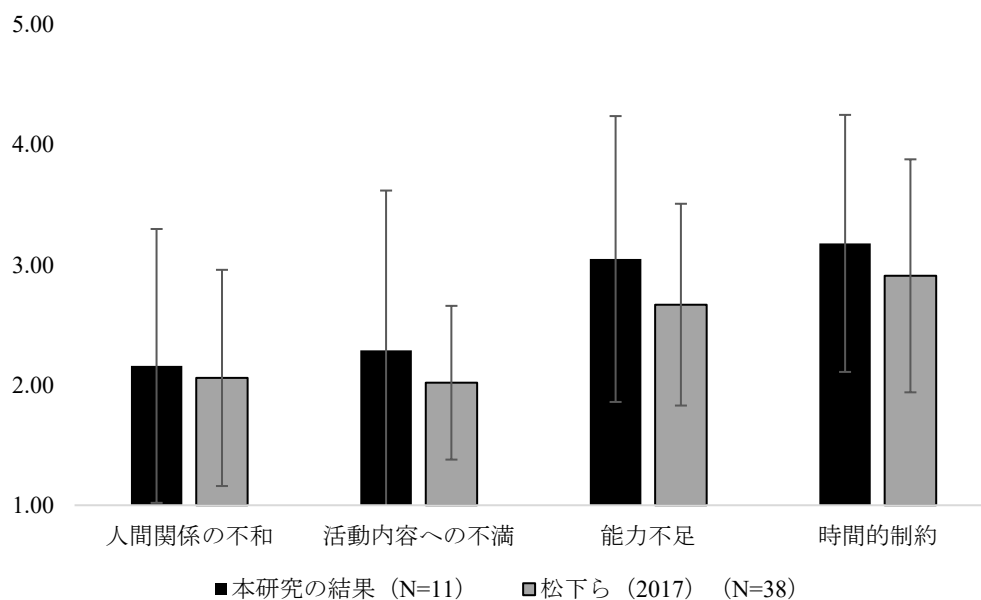
*: $p < 0.05$ 

図 2 否定的要因における平均値の比較

表6 「新たな価値観の芽生え」における自由記述

ノートテイクの方法	・当事者の困難や背景、対面時の支援の行動を考えるようになった。 ・ノートテイクをする際のイメージを持つようになった（例えば、音声学の授業で発音を学ぶとき、教員の発音をどのようにノートテイクするかなど）。
他者からの評価	・式典のノートテイクで自身の名前が表示され、ノートテイク活動に関係のない先輩から「名前があったね」と言われて嬉しかった。式典の情報保障に携わっていることを知ってもらえて誇らしいという気持ちに近かった気がする。
多くの関係者の支え	・見えないところで多くの人に関わっていることを知ることができた。情報保障に限らず、裏側で関わっている人をイメージするようになった。
人の役に立っている意識	・当初は字幕を作ればいいと漠然と考えていたが、現在は人の役に立っている意識がある。授業の支援をしたことで、情報保障を利用する人が身近に感じられるようになったことが大きいかもしれない。 ・当事者との交流会などがあり、「誰かのために支援をしている」ことを実感でき、やりがいになっている。 ・ノートテイクを利用している学生がおり、授業理解に役に立つ情報保障として機能していることを実感した。 ・自分は誰かの役に立っている実感を得ることで、以前よりも自己肯定感が高まったような気がする。 ・オンライン授業で利用学生やノートテイカーの顔が見えない関係で支援を行っていたとき、利用学生からの手書きメッセージをいただいたことに感動した。
アクセシビリティの意識	・テイク利用者かどうかに関わらず、聞いて、読んで、理解しやすい話し方に気づくきっかけになった。 ・これまで気づかなかったような点に気づくことができるようになった。例えば、文章や表記の読みやすさを普段の大学生活で資料などを作成するときに意識するようになった。 ・どんな話し方が聞き取りやすく、意味を伝えやすいかが分かってきた。自分がプレゼンテーションをする際に生かすことができた。 ・日常生活にあるアクセシビリティに気づくようになった。障害がある人や周囲の人が困っている場面やニーズを考えるようになった。客観的に考えたり、当事者視点で考えることができるようになった。 ・さまざまな人に配慮すべきだと意識するようになった。例えば、ホームページを作成する際などに、色覚のある人に配慮したデザインを心がけるようになった。

表7 「自己満足感」における自由記述

リフレッシュ	・緊張感と集中を求められるので、日頃の自身が受講する授業のほうに気が休まるが多かった。 ・週に数回、集中してノートテイクに取り組むことで、勉強やバイトの気分転換をすることができた。 ・授業の合間にリフレッシュできた。
スキルアップ	・タイピング速度の向上からスキルアップを実感でき、その成長には満足している。 ・さまざまな知識や技術を学び自分を磨けることが嬉しく、しっかりと取り組もうと思うようになった。
モチベーション	・対価が得られることで、「今月はこれだけ働いた」という実感が得られたり、モチベーションが上がったりする。 ・金銭が得られることは活動のモチベーションになっていた。 ・ノートテイク活動に対して謝金をいただけるのも、モチベーション維持につながっている。 ・誰かのためにやっていることやスキルアップのためにやっていることでお金をいただけることは効率よく感じ、満足感はある。
責任を果たすこと	・謝金をいただけることやリーダーとして活動することは、満足感とともに仕事の責任につながった。

表 8 「活動を通しての期待」における自由記述

専門的知識・技術の習得	・タイピング速度や整文技術が足りず、うまく情報を文章化できないときがあるため、自分の技術を今後も高めていきたい。 ・先輩方と比べると自身の入力技術はまだまだなので、精度の高いノートテイクができるようになりたい。 ・ボランティアや学生のサークル活動という枠組みでとどまらず、専門的な知識を伴った技術、資格として認められる技術を学べる。 ・タイピングや整文の技術が身につくことに期待している。
交流のきっかけ	・この活動が話すきっかけとなり、今まで話したことがなかったピアサポーター学生と交流を図ることができた。
波及的効果	・当初はあまりタイピングの正確性や速度にこだわっていなかったが、それらを意識することで、テイクラーとしての能力向上に加え、日々の作業効率アップなどの効果もある。
貴重な経験	・活動に参加することでしか得られない貴重な経験という感覚がある。
過去の経験を生かせること	・過去に履修した授業で得た知識をノートテイクで生かせると嬉しい。
支援担当授業への関心	・支援を担当する授業の内容が面白く、成績に関わらないので気楽に授業に出席している感覚だったことがある。 ・専攻以外の授業を聴いてみたいというのは少なからずある。
就職活動に生かせること	・ノートテイク活動は、今後の就職活動で、「学生時代に力を入れたこと」を聞かれたときに言えそうだ。

表 9 「精神的充足」における自由記述

NT 学生からの感謝	・体調不良で欠席した友人の代わりにノートテイクを担当した際に、感謝されて嬉しかった。
知人からの評価	・式典の情報保障を担当した際、自身の名前が流れ、それを見た知人から「すごいね」と連絡をもらい嬉しかった。 ・クラスメイトにノートテイクの説明をすると、感心されたので少し誇らしさを感じた。
将来の役に立つ	・就職などに有利になるような活動なので、自分のアドバンテージにできるようにしっかりと活動していきたい。 ・継続して活動に打ち込むことで、将来の自分のためになると感じて活動を続けられる。 ・ノートテイク技術があることは今後社会に出たときに役立つと思うので、その技術を落とさないためにも活動を続けている。

3.2. 教員養成系以外の大学における卒業後のノートテイク活動に関する予備的検討

自由記述の分類の結果（表 10）、「関与希望あり」は言及数 4、項目数 3、「関与希望なし」は言及数 5、項目数 5 であった。

関与希望がある NT 学生では、知識・技術の活用や関わりを持ち続けたいという希望、地域での活動への関心に関する記述が見られた。また、関与希望がない NT 学生では、職業として考えられないことや他に希望する仕事があること、卒業後もノートテイク活動をするには知識・技術が不安であること、時間的に厳しいこと、活動に参加したいかどうかの判断ができないことに関する記述が見られた。

表 10 卒業後のノートテイク活動への関与希望に関する自由記述：関与希望あり

知識・技術の活用	・福祉分野で役に立てたり、ノートテイク活動で身につけた知識・技術を生かしたい。
もったいない	・大学生活で身につけたノートテイク技術を生かすことに関わりたい。
チャレンジしたい	・卒業後に情報保障との関わりがなくなるのはもったいないと感じる。
	・職業として考えると責任は負いきれないが、要約筆記等にチャレンジしたい。

表 11 卒業後のノートテイク活動への関与希望に関する自由記述：関与希望なし

職業として考えられない	・ノートテイクに関する職業が思いつかないため、検討もできない。 職業としてノートテイク活動に関わることは難しい。専門にしようとは思っていない。
他にしたい仕事がある	・他にしたい仕事がある。
知識・技術の不安	・大学以外で技術が通用するとは思わない。
時間的に厳しい	・副業としてノートテイクをするにも、時間的に厳しそう。
判断できない	・まだ支援の雰囲気がつかめていない。ノートテイクのスキルは生かしたいが、そのニーズがあるかなど分からない。

4. 考察

教員養成系大学の NT 学生に比べて、肯定的要因において「新たな価値観の芽生え」、「自己満足感」、「活動を通しての期待」、「精神的充足」が高い評価であることが示された。「新たな価値観の芽生え」として、ノートテイクの方法や他者からの評価、多くの関係者の支えがあること、人の役に立っている意識、アクセシビリティの意識が示され、これらは松下ら（2019）と同様の結果であった。松下ら（2019）では、「情報保障に対する意識」として示されていたが、本研究からはアクセシビリティの意識といったより広い内容についての記述が見られた。これは、聴覚障害学生等への支援活動以外にも、さまざまなピアサポーター活動が行われていることが関係していると考えられる。

そのため、NT 学生が幅広い活動を行うことが可能な環境を整えることも重要だと考えられる。

次に、「自己満足感」として、リフレッシュできることやスキルアップ、モチベーションにつながることで、責任を果たすことが示された。そのうち、スキルアップと責任を果たすことについては本研究特有の結果であった。これは、継続的なスキルアップの機会があることや、スキルアップの方法として NT 学生が NT 学生を指導するという形式であることが関係していると考えられる。NT 学生と教員が協働して NT 養成研修を実施する形式の場合、受講する NT 学生自身の研修への主体性が高く、参加しやすさなどが明らかになっていることから（下中村ら，2022c）、活動継続について検討する場合は、研修形式についても工夫が重要であると考えられる。

「活動を通しての期待」として、専門的知識・技術の習得や交流のきっかけになること、波及的効果があること、貴重な経験であること、過去の経験を生かせること、支援担当授業への関心があること、就職活動に生かせることが示された。そのうち、波及的効果、貴重な経験、過去の経験を生かせることについては本研究特有の結果であったが、金銭が得られること（松下ら，2019）に関する記述は見られなかった。これは、教員養成系大学の学生のほうが障害児・障害者と関わる機会が多いが（高橋ら，2020）、教員養成系以外の大学の学生の場合はそのような機会が乏しいことで、ノートテイク活動によって金銭が得られるアルバイトの感覚であるというよりも、活動そのものを特別な経験として意識していることが関係していると考えられる。そのため、ノートテイク活動に携わる際は、活動に関する経験の質を確保するために、聴覚障害学生等の当事者と関わる機会を設定するなどの工夫も必要だと考えられる。

最後に「精神的充足」として、他の NT 学生から感謝されることや知人からの評価が得られたこと、将来の役に立つことが示された。そのうち、他の NT 学生から感謝されることについては本研究特有の結果であったが、気分転換する時間を確保すること（松下ら，2019）に関する記述は見られなかった。これは、各 NT 学生がノートテイク活動を仕事として捉えていることが関係していると考えられる。ノートテイク活動に携わる学生は継続的な研修を受講しており、授業での支援活動に携わった際に謝金 that 得られる仕組みとなっている。このように専門的技術を持っており、謝金があることで、その認識の醸成につながっていると考えられる。

一方で、否定的要因においては教員養成系大学との違いが見られず、ノートテイク活動の経験年数の長短や卒業後のノートテイク活動への関与希望の有無では、活動継続要因に違いは見られなかった。卒業後もノートテイク活動を希望する学生の中には、知識・技術の活用に関する記述が見られたことから、専門的知識・技術を高めることが、継続要因につながる可能性があると考えられる。今回は調査対象者数が限られていたため、今後、ノートテイク活動の継続に影響する要因についてさらに検討する必要がある。

本研究では、教員養成系大学のうち、特別支援教育専攻の学生が多数の割合を占める大学と比較し、継続要因の違いについて検討した。今後、学生が専攻する分野によって継続要因に違いがあるかについても検討する必要がある。また、肯定的要因と否定的要因について自由記述の結果から、NT 学生の専門的知識・技術を高めたり、モチベーションを維持したりするなど肯定的要因を高めるとともに、NT 学生 1 人あたりの支援担当の負担などの否定的要因を取り除く必要がある内容など、今後の NT 学生養成に生かす上で参考となる内容も見られた。今後は、これらの内容も生かし

た養成内容について検討する必要がある。

引用文献

- 池谷航介・井坂行男・楠敬太・望月直人（2021）高等教育機関における意思疎通支援の実施状況に関する実態調査－情報保障の提供が困難となる要因について－. 高等教育と障害, 3(1), 1-14.
<https://ahead-japan.org/journal/03-01/01.html>（2022 年 10 月 19 日閲覧）.
- 小林優子（2017）聴覚障害学生への情報保障を通じた関わりが健聴学生に及ぼす影響. 上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要, 23, 37-41.
- 増田貴人（2018）聴覚障害学生を支援する学生のノートテイクとしての支援観形成過程－内省ノートの分析から－. 弘前大学教養教育開発実践ジャーナル, 2, 37-46.
- 松下真咲・井坂行男（2017）障害学生支援における支援学生の継続意思を阻害する要因に関する研究. 大阪教育大学紀要, 65(2), 27-33.
- 松下真咲・井坂行男（2019）障害学生支援における支援学生の継続要因. 大阪教育大学紀要, 67, 17-27.
- 文部科学省（2001）今後の国立の教員養成系大学学部の在り方について（報告）. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/005/toushin/011101.htm（2022 年 10 月 29 日閲覧）.
- 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（2006）ノートテイク養成の手引き. <https://www.pepnet-j.org/wp-content/uploads/2021/11/tebiki.pdf>（2022 年 10 月 19 日閲覧）.
- 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（2007）大学ノートテイク支援ハンドブック－ノートテイクの養成方法から制度の運営まで－. 人間社.
- 下中村武・鈴木大輔・田島晶子・今村栞・川口智也・横田晋務・田中真理（2021）オンライン環境における障害学生支援の実践. 基幹教育紀要, 7, 155-174. https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/4363107/p155.pdf（2022 年 10 月 13 日閲覧）.
- 下中村武・田中星夏・中野光里・岸川加奈子・横田晋務・田中真理（2022a）音声情報の取得に困難のある学生への文字による遠隔情報保障に関する実践的検討－聴覚障害のある学生への支援から－. 基幹教育紀要, 8, 69-87. https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/4772825/008_p069.pdf（2022 年 10 月 13 日閲覧）.
- 下中村武・岸川加奈子・箕浦伸子・疋田弥紅・本田いずみ・楠瀬樹宜・白澤麻弓（2022b）キャリア教育の視点を踏まえたノートテイク養成の検討－大学におけるノートテイク養成の現状と卒業後のロールモデルの提示から－. 日本特殊教育学会第 60 回大会自主シンポジウム.
- 下中村武・福島恵美・重信まこ・岸川加奈子・横田晋務・田中真理（2022c）指導学生と教員の協働によるノートテイク養成研修－研修参加学生の認識に着目して－. 全国高等教育障害学生支援協議会第 8 回大会抄録発表.
- 新海晃・澤隆史（2017）パソコン要約筆記を用いた情報保障における支援学生および聴覚障害学生のニーズに関する一研究－教員養成系大学に在籍する学生を例に－. 聴覚言語障害, 46(2), 79-93.
- 白澤麻弓・徳田克己（2002）聴覚障害学生サポートブックとともに学ぶための講義保障支援の進め方. 日本医療企画.

- 白澤麻弓（2004）聴覚障害学生に対するサポート体制についての全国調査. https://www.pepnet-j.org/support_contents/textbook/20050530_chosa（2023 年 1 月 24 日閲覧）.
- 白澤麻弓（2017）高等教育における聴覚障害学生支援. トピック別聴覚障害学生支援ガイドーPEPNet-Japan TipSheet 集（改訂版）ー. <http://hdl.handle.net/10460/1914>（2022 年 10 月 13 日閲覧）.
- 高橋咲良・中野裕美子・水内豊和（2020）障害理解をねらいとした教養科目講義を受講した大学生の知的障害者に対する意識変容. とやま発達福祉学年報, 11, 11-17.
- 吉川あゆみ・太田晴康・広田典子・白澤麻弓（2001）聴覚障害学生をサポートする大学ノートテイク入門. 人間社.